

展 示 品 目 録

書名	刊行年	内 容
Phytanthoza-Iconographia / Johann Wilhelm Weinmann	1737-1745	(花譜 / ヨハン・ウィルヘルム・ウェインマン) 薬種商のウェインマンが、多くの画家を雇って植物画を描かせそれをまとめて出版した図譜集。植物名は二名法以前のラテン語で記されており、アルファベット順に集録されている。図版は銅版手彩色。植物画家のエイレットによる画も含まれている。 ラテン語版、ドイツ語版、オランダ語版がほぼ同時期に出版された。江戸時代の日本にオランダ語版が入り、当時の本草学者に影響を与えた。当館ではドイツ語版を所蔵。
Figures of the most beautiful, useful, and uncommon plants described in the Gardeners dictionary / Phillip Miller	1760	(園芸事典収録植物図集 / フィリップ・ミラー) フィリップ・ミラーの著作「Gardener's dictionary (園芸事典) 1731」に記載した植物から、300種を選んで図にした図譜集。エングレーヴィングによる彫版と手彩色で制作されている。内16図は、植物画家エイレットの手によるもの。 Phillip Miller(1691-1771): チェルシー植物園の初代園長であり、当時のイギリス園芸界の中心的存在であった。
The botanical magazine, or, Flower-garden displayed	1787-	(植物学雑誌) 薬剤師で園芸家のウィリアム・カーティスによって創刊された植物学雑誌。当時のイギリスの植物園で栽培されていた海外の目新しい植物を紹介する目的で始められた。植物画家が描き彩色されたカラー図版と、専門家による詳しい解説が掲載されている。一枚の図に一種類の植物を描くという、いわゆる「植物画(ボタニカルアート)」の形式を確立させた雑誌とも言われている。シリーズ4までの図版は、一部を除き全て手彩色。現在もイギリスのキュー植物園から「Curtis's Botanical Magazine」の誌名で刊行され続けている。
Transactions of the Horticultural Society of London	1815-1848	(ロンドン園芸協会紀要) 協会の学会誌だが、図版や装丁、紙や印刷に至るまで豪華な本。当時の有名な植物画家(ウィリアム・フッカー、ウィザーズ夫人等)が図版を手掛けている。 ロンドン園芸協会は今日まで続く園芸愛好団体で、陶磁器メーカーウェッジウッドの創設者ジョサイアの長男ジョン・ウェッジウッドが1804年に創設した。ジョンの植物への関心はウェッジウッド製品のデザインにも影響を及ぼしているという。1861年、王立園芸協会となった。
Revue horticole : journal d'horticulture pratique	1829-	(園芸雑誌: 実用的な園芸の雑誌) 1829年にフランスで創刊された、隔月発行の園芸雑誌。19世紀に発行された園芸雑誌の中でも重要なものの一つとされている。1966年からは、植物学者で園芸家でもあるカリエルが編集長を務めた。 Élie-Abel Carrière(1818-1896): Tsuga(ツガ属)等の属名の考案で知られる。
L'illustration horticole : Journal special des serres et des jardins	1854-1893	(挿画入り園芸雑誌: 特別な温室と庭園の雑誌) ベルギーの園芸家Ambroise Verschaffeltによって創刊された月刊誌。当時の著名な植物画家や石版作家が手掛けた、新種や栽培品種の多色刷石板図版・植物の歴史や文化、園芸の歴史等の記事・新製品情報・主要な展示会や学会の報告などで構成されている。1869年からはリンデンが編集を引き継いだ。 Jean Jules Linden (1817-1898): 蘭の分野で特に有名なベルギーの園芸家。新種を求めて自らプラントハンティングにも参加し、息子とともに園芸ビジネスを成功させた。
Illustrierte Garten-Zeitung : Eine monatliche Zeitschrift für Gartenbau und Blumenzucht	1857-	(挿画入り園芸新聞: 造園と花卉栽培の月刊誌) シュツットガルトの園芸協会が発行した園芸雑誌。植物の品種解説やカラー図版に加え、庭園についてもカラー図版入りで記述されている。
Atlas der officinellen Pflanzen : Darstellung und Beschreibung der im Arzneibuche für das Deutsche Reich erwähnten Gewächse Bd.1-4	1893-1902	(薬用植物図譜: ドイツ帝国の薬局方に挙げられた植物に関する記述) 薬用として用いられる植物の図譜集。図版を手掛けたSchmidtは、ドイツで多くの植物画を描いた19世紀の画家。「特に賞賛される図版は、筆致と着色が美しいだけでなく科学的精度も高い。一般的な植物学者に役立つと同時に、薬用植物を学ぶ学生にとっても価値ある著作となるであろう。」(Science N.S. Vol.10 P.28 1899より)

展 示 品 目 録

書名	刊行年	内 容
The journal of the College of Science, Imperial University of Tokyo, Japan(東京帝國大學理科學紀要) Vol. 43 Art. 1 より「Die japanischen Bergkirschen, ihre Wildformen und Kulturrassen. / Manabu Miyoshi」	大正5(1916)	(日本のヤマザクラ、その野生種と栽培品種 / 三好學) ヤマザクラ及びサトザクラ(園芸品種の総称)の来歴、品種、ヤマザクラの学名問題、サトザクラの保存等について論述されている。附図のヤマザクラ及びサトザクラの写生図(全16図)は、洋画家佐藤醇吉による原図を用いた多色刷石版画。 三好學(1862-1939): サクラの園芸品種を初めて科学的に研究した、日本におけるサクラ研究の第一人者である。また、植物生理学者W. ペッファーの門下生でもあり、日本の植物生理学発展に貢献した。
きんもう ずい 訓蒙図彙	[寛政元] (1789?)	初版寛文6年(1666)。中村暢齋著、下河辺拾水画。江戸時代前期に作られた「絵入り百科事典」。分かりやすいスタイルで広く普及したらしく、初版刊行以後、大幅な増補改訂を経て何度も刊行されている。本書は第4版。
いがんさいおうひん 怡顔齋櫻品	宝暦8 (1758)	初版宝暦7年(1757)。著者の松岡玄達(恕庵・怡顔齋)は京都の儒学者・本草学者。本書は著者の没後に門人が刊行したもので、玄達の序は約40年前の享保元(1716)年。桜の園芸品69種について、図入りで解説している。
いがんさいばいひん 怡顔齋梅品	明治24 (1891)	初版宝暦10年(1760)。松岡玄達著。梅の園芸品種60種について、図入りで解説している。『桜品』同様、著者の没後に門人によって刊行された。この他「介品」「菌品」「蘭品」…など、特定の動植物について解説した博物学的な著述を多く残した。
かい もく ぶ 花彙 (木部)	天保14 (1843)	初版宝暦13年(1763)。小野蘭山著。著者は松岡玄達の門人。同門の島田充房による草部を引き継ぎ、草部・木部全8巻を完成させた。伝統的な「本草書」には必須の薬効などの記述を省き、純粋に植物について論じた書。蘭山による写実的な植物図は秀逸。
そうもく せいふ 草木性譜	文政10 (1827)	清原重巨著。草木45種についての図説。著者は尾張の本草学者。本書には水谷豊文ら、尾張の本草家や画家28名が参加し、それぞれ草木一品以上を受持って各植物に繊細な筆致の図を付している。一部色刷りあり。
ほんぞうずふ 本草図譜	大正5-11 (1916-1922)	初版文政11-天保15年(1828-1844)。岩崎常正(灌園)著。カラー木版刷り。原本は当初木版・手彩色で版行されたが経費が維持できず、後には手彩色写本という形で予約販売された。日本最初の植物図鑑というべきもの。本書は大正期の復刻版。
ちぐさ ね 千種の根ざし	文政13 (1830)	殿村常久著、岩崎常正画。『枕草子』に登場する草木26種の考証。図は岩崎常正による。著者は伊勢松坂の商人で国学者。本居宣長から国学を学ぶ一方、家業で江戸に下る際には岩崎常正から植物についての指導を受けた。
そうもく かじつ しゃしん ずふ 草木花実写真図譜	不明	川原慶賀著。天保7年(1836)に刊行された『慶賀写真草』(墨刷り)を改題して彩色版とし明治・大正期に再刊したもの。著者は長崎の画家で、シーボルトの為に多くの植物画を描いた。西洋の知識で描かれた植物図譜集。
しつもんほんぞう 質問本草	天保8 (1837)	呉継志著、村田経稻校訂。薩摩藩の命により編纂された薩南諸島・琉球諸島の植物誌。160種の植物についての優れた図および解説で、薩摩本草学中出色の書と言われる。
へいし そうもく ずふ 瓶史草木図譜	[明治14] (1881)	大村純道著。中国の明代の花書『瓶史』(袁宏道著)に記載された花を研究した『瓶史草木備考』(上下2巻)の図譜集。約60種の植物について淡彩の優れた図を載せている。
もみぢ	明治44 (1911)	久保田金僊画。もみぢの園芸品種の葉187種を精密にスケッチした画集。久保田金僊は京都生まれの日本画家で、明治から昭和にかけて活躍し、日清・日露戦争では従軍記者として戦争画も制作した。
よけい つく にわ ず 餘景作り庭の図	[大正8] (1919)	初版延宝8年(1680)。菱川師宣画。作庭造園の絵本。浮世絵師 菱川師宣(?-1694)が手がけた絵入り版本のひとつで、四季折々の庭園に人物が調和して描かれている。初版の他に元禄版などがあり、本書は大正期に延宝版を復刻したもの。
つきやまていぞうでん ぜんべん 築山庭造伝 前編	[安政年間?] (1854-60)	初版享保20年(1735)。北村援琴著、藤井重好画。後に秋里籬島によって出版された同名の作庭書と区別するために『築山庭造伝 前編』と呼ばれる。庭園を造る際の築山や池、樹木の配置などについて、具体的かつ詳細に記述した作庭書。
つきやまていぞうでん こうべん 築山庭造伝 後編	安政6 (1859)	初版文政12年(1829)。籬島軒秋里著。北村援琴による同名書を元に、作庭に関して更に具体的に記述したもの。「築山」と「平庭」についてそれぞれを真・行・草の格に区分し、その庭園構成を詳細に記した。著者は名所図会の刊行で知られる人物。